製糖業から見る台湾

日本統治時代 社会変化たどる

日比谷図書文化館で講演

工場建設 土地所有者に影響

日本統治時代（1895～1945年）の台湾で主要産業となった製糖業の発展過程から社会変化をたどる講演「日本統治期台湾の製糖工場はどのように地域を変えたのか」が11日、千代田区の区立日比谷図書文化館で開かれた。熊本県立大の辻原万規彦教授（都市史）が、製糖工場の建設や土地所有の変化が地域に与えた影響などについて解説した。【鈴木玲子】

辻原教授は、戦前の台湾に44カ所あったという機械式の製糖工場跡を調査して回った。

さらに、統治が始まった明治時代から大正時代にかけて、工場とその周辺のサトウキビ畑の土地所有者の変遷を丹念に調べた。こうした土地管理の変遷から、台湾が日本統治下に組み込まれていく過程を読み解いた。

辻原教授によると、統治初期には、製糖工場とその周辺の土地の多くが台湾人の所有だったが、次第に内地と呼ばれた日本からの製糖会社の資本が進出して、大規模に土地を買収。新式の機械式製糖工場が各地に建設されたという。辻原教授は「台湾でサトウキビの製糖業がうまくいったのは、そのシステムを後に北海道や樺太でのてん菜による製糖業に導入していった」と説明した。

一方、同館の特別研究室では企画展示「内田嘉吉文庫に見る日本統治期台湾の産業」が開催されている。

研究室では、元台湾総督の内田が残した蔵書約1万6000冊を所蔵。その蔵書には台湾の産業に関する資料が数多く含まれる。

同展では「日糖最近十年史」（1919年）といった貴重な書籍や写真などを展示。製糖業のほか品種改良が進められたコメ、茶や樟脳（しょうのう）など主要産業の発展と共に、鉄道や港湾などのインフラ整備が進められた様子を伝え、産業の視点から社会変化を紹介している。30日まで。入場無料。

企画展示「内田嘉吉文庫に見る日本統治期台湾の産業」では写真や書籍などが展示されている＝千代田区の区立日比谷図書文化館特別研究室で